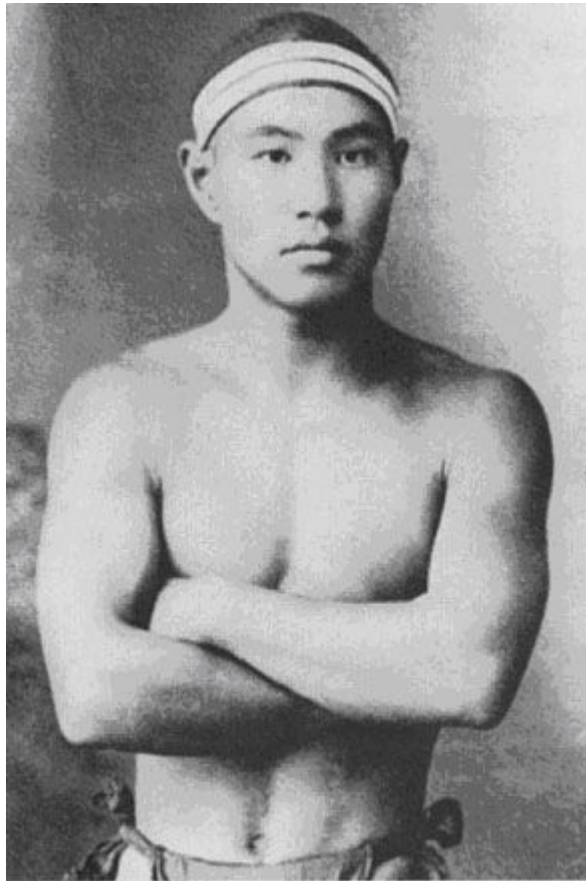


内田正練とその時代

—日本にクロールがもたらされた頃—



北大予科時代の内田正練(浜松北高水泳部百年史)

内田正練(うちだまさよし)氏は北海道大学水泳部の大先輩です。大正9年(1920)のベルギーアントワープ大会に参加した**日本最初のオリンピック水泳代表選手**であり、彼の地でクロール泳法を会得して帰国し、広くクロール泳法を日本に広めた日本近代水泳の功労者であります。しかしながらこれまで彼の功績はほとんど世に知られていませんでした。今回内田正練氏の業績を再確認しようと過去の記録をまとめ北海道大学総合博物館第20回企画展示を計画しました。本書はそのパンフレットとして作成したもので、当時の競技記録と写真をもとに日本泳法からクロール泳法へと転換していった大正末期の水泳事情と内田正練氏の足跡を辿ろうとするものです。

内田正練氏は明治31年(1898)1月7日浜松にて5人兄弟の次男として誕生しました。生家は浜松の名家で父は地元の産業を、母は女医として浜松駅前にて産科婦人科の病院を開業する活動家でした。兄内田千尋(東大)が水府流の師範であった影響で内田正練も浜一中に入学後同校水泳部や浜名湾游泳協会で水泳の技を磨き水府流の師範となりました。彼は当時日本最強の泳者で、中等学校水泳大会や極東大会で中長距離の泳者として活躍していました。大正5年(1916)に北大予科に入学後も豊平川や中島公園池の水泳場で水泳の研鑽を続け、大正9年(1920)5月に横浜で行われたオリンピック国内予選で優勝し日本最初のオリンピック水泳競技代表選手に選ばれました。ベルギーアントワープで行われたオリンピック大会の水泳競技では100m自由形と400m自由形に日本泳法で出場し、どちらも予選で敗退しましたが、水泳で世界と戦うにはクロール泳法を会得する事が必須であると認識し、彼の地で近代クロール泳法を会得して帰国しました。当時の日本国内では日本泳法を研鑽すれば世界と戦えると考える人も多くいて、諸手をあげてクロールを受け入れる状況ではありませんでしたが、世界と戦うにはどうしたらよいかと言う観点から内田正練は北海道内において積極的に講習会や水泳大会を主催してその普及に努めました。その結果、大正14年(1925)には極東大会代表選手時任巖を有した函館中学が全国優勝を飾り、その後宮下利三(札一中、北大)、松浦武雄(北海中、立大)、根上博(余市中、立大)など極東大会や国際オリンピック大会で活躍した代表選手を輩出しました。北海道大学農学部卒業後は妻子を伴ってアルゼンチンに移住し苦勞をしながらも大規模農園を経営しました。帰国後は同郷の鈴木陸軍大佐の呼びかけに応じビルマ独立義勇軍の將軍として活動し、ラングーン入城を果しました。その後海軍の司政官としてニューギニアに赴任しましたが、昭和20年(1945)2月14日惜しくも戦死、47歳の生涯を閉じました。今年はその没後60年にあたります。内田正練氏の世界を股にかけたスケール大きな活躍ぶりをみると、彼こそ、**”Be Ambitious”** というクラーク精神を発揮して世界的に活躍した北大生のひとりであったという思いを強くします。